

建築家に何が可能か

What Do We Contribute as an Architect?

千葉学 Manabu Chiba

東京大学大学院工学系研究科教授、株式会社千葉学建築計画事務所 / 1960年生まれ。東京大学卒業 / 同大学院修士課程修了。建築意匠。著書に『Jpeak Manabu CHIBA』『rule of the site そこにしかない形式』ほか。「日本盲導犬総合センター」で日本建築学会賞(作品)ほか、「大多喜町役場」でユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞功績賞ほか、「工学院大学創立125周年記念総合教育棟」で村野藤吾賞ほか

釜石市の取組み

東日本大震災から4年が経った。この時間経過のなかで見えてきた各自治体の対応は、多様である。地域ごとの特性をきめ細かく拾い上げながら復興に取り組んでいるところもあれば、大組織に多くを委ねて一気に計画を押し進めているところもある。僕たちがかわる岩手県釜石市では、建築家の伊東豊雄や東北大学の小野田泰明、工学院大学の遠藤新を復興ディレクターに迎えて「かまいし未来のまちプロジェクト」を立ち上げ、街の将来像を描くとともに、市が整備するプロジェクトの設計者をコンペによって選ぶという、極めてユニークな取組みを継続してきている。コンペの審査から設計のプロセスまでを可能な限り市民と共有し、民意をくみ取った計画を丁寧に実現していくのである。すでに復興公営住宅から市民ホール、小学校などのコンペが実施され、多彩な顔ぶれの建築家が釜石

に集結することとなった。

しかしながら4年を経てもなお、すべてのプロジェクトが順調に進んでいるとは言えない状況にあるのは多くの人の知るところであろう。建設価格の高騰、職人不足など、日本の各地から聞こえてくる困難な状況は、被災地ではなおさらである。度重なる入札不調のために、計画そのものを見直さなくてはならない状況も生まれている。このような社会情勢を背景に釜石市では、「建物提案型復興公営住宅買取事業」や「敷地提案型復興公営住宅買取事業」など、新たな取組みに踏み出した。つまり市有地や民有地において、設計、施工も含めて完成した建物を市が買い取る、というものである。価格や工程などは事業者の責任において全うされなくてはならないから、その分市が抱えるリスクは軽減される。設計、施工という通常の事業プロセスに必要な市側の業務も大幅に軽減される。そして何よりも、仮設住宅での過酷な生活を

者として選定されて動き出すことになったのである。

シンプルな「箱」にできること

大町の計画は、四つのシンプルな「箱」が寄り添うようにしてできている。一つひとつの「箱」は、ありふれた矩形の建築だが、相互の関係性と、そこに生まれるすき間のデザインに的を絞って設計している。このような「箱」の組み合わせで設計を進めることになった理由は大きく二つある。ひとつには、今回の計画が大手ハウスメーカーとの協働によるものだからである。ハウスメーカー独自の技術や工法を採用して計画を進めること、また限られた予算と工期のなかで可能な仕様を選択することは前提条件である。鉄骨ラーメン構造に既存の外壁パネル、数多くの既製品の使用といった限られた条件下で何が可能なのか、その問いがあらゆる判断の場面で繰り返されている。

もうひとつには、今後この復興公営住宅に住むことになる住民のコミュニティの様相がある。釜石市では、阪神・淡路大震災後に孤独死が多発したことへの反省から、住民同士が常に見守れるような住宅をつくることを基本方針として打ち出した。例えばリビングアクセスのような、お互いの生活の様子がうかがい知れる関係を構築することは、設計の初期条件だったのである。しかしながら、僕たちが継続的に行ってきたワークショップを通じて見えてきたコミュニティは、複雑で多様である。特に市街地においては、

強いられている被災者に、一日でも早く、確実に、公営住宅を提供することができ、この安心感がこれらの事業を後押しすることになった。僕たちは、この買取事業のひとつである大町での復興公営住宅の計画にダイワハウス岩手支店とともに応募し、事業



図1 釜石市復興公営住宅大町1号 [図1-3 提供: 千葉学建築計画事務所]



図2 釜石市復興公営住宅大町1号 基準階平面図



図3 釜石市復興公営住宅大町1号 住戸アクセメ

若い共働きの夫婦もいれば、プライバシーやセキュリティを気にする人たちだっている。さらには、もともとこの地に住んでいたわけではない人たちも一緒に住むことになるから、親密な関係だけを前提にした計画はむしろ不自然なのだ。四つの箱を、外周をめぐる「縁側」によって緊密に結びながらも、敷地中央に設けた「通り庭」によってお互いを引き離しているのはそのためだ。家を一步出ればすぐにお隣同士と顔を合わせることができコミュニティの場をつくり、その光景が道路沿いに溢れ出すよう配置しつつも、各住戸の居間は、縁側からは奥まった場所にあり、窓外にはまるで隣の街区を見るかのような、相互に距離を持った住棟の風景が広がっている。この「縁側」と「通り庭」がまるで手袋を裏返したような関係を築くことで、近隣との親密な関係も、自分だけのプライベートな居場所も併せ持つ選択性を持った空間を生み出したのだ。そこには、親密さを演出するためだけの形も表層も必要ない。むしろ素っ気ない箱の関係性だけで、コミュニティを育むための魅力的な場所は十分に作り得るのである。

建築家に何が可能か

この計画を通じて見えてきた課題は、

大きく二つある。ひとつには、今なお変化し続ける被災地の状況に向ける建築家の眼差しの「解像度」である。僕たちが直面しているコミュニティは、先にも記したように、数多くの矛盾を抱えている。必要なのは、「濃密なコミュニティ」などといった部外者的な目線で一括りにして描く美談などではなく、この複雑な現実寄り添い、地域性や文化や生業を丁寧に拾い上げていく「解像度」なのだ。それは今回の震災を経て建築家が習得すべきひとつの「技術」であるし、その先にしか次の時代に向けての指針は見えてこないと思うのだ。なぜならこの技術の欠如は、巨大な防潮堤で津波に備えようとする思考と地続きだからだ。

もうひとつは、建築家の「職能」とも言うべき課題である。というのも、ハウスメーカーとの協働には、デリケートな問題を孕んでいるからだ。なぜならそれは、巷で広がりつつあるデザイン・ビルドという発注形態へと横滑りしかねないからである。それでもなお、こうした困難な状況も含めてデザインの対象とする姿勢を維持したいと思うのは、従来どおりの建築家的振る舞いに固執し、結果的に英雄的撤退を余儀なくされる事態が建築家に与える社会的ダメージの方が、遥かに大きいと感じているからである。建築家は、独創的なデザインにこだわる人た

ち、といった程度の認識は、まだまだそこから中にある。だからこそ、被災地から撤収することなく、どんな立場にせよかわり続け、建築的知恵を提供し続けることで街や生活の質を向上させる、それこそが建築家の役割であることを、身をもって示し続ける以外に取りうるの方法は、今のところ見当たらない。

結果的に僕たちは、この大町の計画のほかに三つの復興公営住宅にかかわることになった。同じ釜石市街での計画であり、ダイワハウスとの協働という体制も変わりはない。予算や工程、あるいは現場での予期せぬ事態も含め、困難な状況は一層厳しさを増しているが、新たな復興への展開も見えつつある。それは、群として出来上がる住宅群を、釜石の花であるまゆりの色で、そして居住空間をつくることのできない1階を、街のキャンパスのように真っ白に塗って、住民が今後長い年月をかけてつくり上げていくような場所にしようというものである。まるで街のあちらこちらに花が咲くように、今回の復興の記憶を街の風景に記せればという考えが、釜石市や小野田泰明との議論のなかで生まれてきたのである。どんな立場にせよ撤収しないこと、そこから得られる数多くの気づきに、まだまだ賭けてみたいと思うのだ。